

《第 494 回(2022 年 9 月 8 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:6 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『牧野富太郎 植物の神様といわれた男』横山 充男/著, ウチダ ヒロコ/絵 くもん出版
『草木とみた夢 牧野富太郎ものがたり』谷本 雄治/文, 大野 八生/絵 出版ワークス

9 月の読書会では、高知県出身の植物学者、牧野富太郎の伝記を 2 冊読みました。1862 年(文久 2 年)に、現在の高知県高岡郡佐川町に生まれた牧野富太郎。商家の若旦那として育った富太郎は、幼いころから植物に強い関心を抱いていました。その熱中ぶりは止まるところを知らず…。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。以下、『牧野富太郎 植物の神様といわれた男』を『植物の～』、『草木とみた夢 牧野富太郎ものがたり』を『草木と～』と省略して表記いたします。

●『草木と～』は、イラストが好き。草木に対して夢を持ち、恋している感じがよく伝わる。短い中でもきちんと書き込まれていて、牧野の人生の歩みを分かりやすく伝えている。『植物の～』は、周囲の苦労をかなりオブラートに書いているな、という印象。本人の知らないところでも、いろんな人が支えていたのだろう。でも、周囲の支えと苦労があったからこそ、牧野は素晴らしい功績を残したのだと思う。ここまで自分の「好き」を貫いた牧野が羨ましい。どちらの本も、子どもにも分かりやすく書かれている。

●『草木と～』は、絵がほんわかしている。ページ下部の解説や、見返しの年譜が分かりやすい。『植物の～』を読んだとき、『草木と～』の年譜と照らし合わせて読むと理解が深まった。『植物の～』の、成長していく牧野富太郎の姿を描いた表紙絵もいい。作者の横山が書く土佐弁は分かりやすかった。また、エピソードの書き方や着眼点にユーモアがある。牧野は本当に人に恵まれて幸せな一生だったんだなあと思った。最後、佐川の桜を絡めて締めくくることがとてもよかった。

●2 冊とも表紙の牧野が優しくな顔をしていて、手にとりやすい。『草木と～』は、植物がきれいに描かれている。絵も内容も読みやすい。『植物の～』は、資料のように読めて良い。牧野は周囲を振り回してばかりだけど、「愛すべきキャラ」として描かれている。作者の横山の視線は優しく、ユーモアがある。牧野のように、好きなことにここまで熱中することは、自分にはできない。本人の努力もすごいと思うが、周りに助けられる人が多くいて、本当に運が良かったのだと思う。

●『草木と～』で描かれている植物の絵は、牧野自身のスケッチにタッチが似ている。好きなことを突き詰める牧野の姿はドラマチック。『植物の～』は、牧野本人のユーモアと作者のユーモアが相まって、読みやすい。牧野は、お金の使い方がかなり破天荒。こども向けに書かれているが、少し引いた。妻の寿衛が、亡くなる時に牧野に感謝を述べるシーンがあった。その感謝の背景には、武士の家に生まれながらも菓子屋の店番になるしかなかった自分を救い出してくれた、ということがあるのかも。

●2 冊とも読みやすかった。牧野に対しては、なんとなく「穏やかで優しい人」というイメージを抱いていたが、『植物の～』を読んで、「ぶっ飛んで世間知らずで無計画な人」という面が強く感じられた。こども向けの作品なのでマイルドに書かれているのだと思うが、実情は恐らくもっとすごかったのだろう。『草木と～』の牧野は、自分の中にあった従来通りのイメージ。同じ人物の伝記を複数冊読むと、色んな面を知ることができて面白い。

●どちらの本も牧野を上手に描いていると思った。牧野は少し困った人だとは思。育てた祖母も支えた妻も偉い。出世も名誉も興味が無く、あるのは尋常ならざる植物への情熱のみ。そんな牧野だからこそ周りの人はひきつけられ、助けてくれたのだと思う。特に魅かれるのは、後半生。研究も大切にしながらも植物知識の普及に力を注ぎ、植物を好きな人を増やすのも自分の役目だと全国で観察会を開いていたとのこと。全国に種を蒔いていたのだな。

次回 10 月 13 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『グロスターの仕立て屋』ピアトリクス・ポター/作・絵, 川上 未映子/訳 早川書房

『グロスターの仕立て屋』ピアトリクス・ポター/さく・え, いしい ももこ/やく 福音館書店

申込み・参加費不要。新型コロナウイルス感染拡大の状況により、変更・中止となる場合があります。

変更・中止については、オーテピアのウェブ・サイトにてお知らせします。